

ホートリー*

— 未刊の著『正しい政策』考

平井俊顕

1. はじめに

ラルフ・ホートリーは、貨幣的な景気変動論を展開したエコノミスト¹として知られる。また、いわゆる「大蔵省見解」の理論的根拠の提供者²としても — したがってケインズと反対の論陣を張った人物としても — 知られる。さらに、ホートリーは『貨幣論』のケインズにたいし、自らのスタンスから厳しい批判を展開した論者でもある³。こうした比較的良好に知られている経済学者としての側面は別の機会に譲り、本稿では、今日忘却のかなたにある彼の社会哲学⁴に焦点を合わせる。

ホートリーはケンブリッジの知的環境下で育った — とりわけ、アポッスルであったという点が重要である⁵ — が、ケンブリッジで研究生活を送ったわけではない。卒業後、大蔵省に入省し、以降、退官するまでのほとんどを省内唯一のエコノミストとして活動した人物である。彼は社会哲学の著作を2点公刊している（1点は『経済問題』（Hawtrey[1926]. 以下、*EP* と略記）⁶、もう1点は『経済的命運』（Hawtrey[1944]. 以下、*ED* と略記））が、本稿では最晩年の未刊の著『正しい政策 - 政治学における価値判断の位置』（Hawtrey Papers, 12/2. 全18章、タイプ刷りで528枚。以下、*RP* と略記）に焦点を合わせてる。

『正しい政策』は、ムーア倫理学、とりわけ「善の定義不可能性」を根底にすえつつ、経済学・社会学・政治学の領域を批判的に検討した著作である。副題にいう「価値判断」とは、「真の目的」に照らしての判断を意味している。

『正しい政策』の全体は次のような構成になっている。第1章「目的」、第2章

「善」および第3章「哲学的宗教」では倫理的領域が、第4章「政府」、第5章「自由」および第10章「階級」では政治学・社会学的領域が、そして第6章「経済的ファンダメンタルズ」、第8章「労働」および第9章「分配の問題」では経済学的領域が、第7章「資本主義と集産主義」では比較体制の問題が、第11章「バランス・オブ・パワー」から第17章「大国の結合」では国際政治学の領域が、扱われている(第12章「植民地」、第13章「戦争問題」、第14章「共産主義と国民性」、第15章「パワー・ポリティックスとイデオロギー」、第16章「平和共存の条件」)。そして第18章として「結論」がくる。

本稿は、第2節で『正しい政策』の主題に言及し、第3節ではその基礎にある「アスペクトの理論」をみる。第4節でムーア主義倫理学を一瞥した後、ホートリーの社会認識(第5節)、経済認識(第6節)、世界平和(第7節)をみていくことにする。第8節はケンブリッジで展開された哲学についての概観である。

2. 主題

題名「正しい政策」は、道徳律のうち、(諸個人との関係の、ではなく)「共同体との関係での」人の行動を含意している⁷。ここでいう「人」は、公衆ではなく指導者であり、その果たすべき義務に重点がおかれている。公共政策に責任のある指導者は一市民とは異なる存在であり、一市民がその生活を導くところの「中間的な目的」— それは手段でしかなく、「状況や帰結に制約を加えることを気にせずに行動することが許されるとき」(p.528)「偽りの目的」になる⁸— に甘んじるべきではなく、その行動のすべてを「善」という究極の評価のもとにおくべき、とされる⁹。

純粋な理性が認める唯一の目的(究極的目的)は善である¹⁰。「正しい」政策とは、指導者が目指さねばならない「正しい」目的(「中間的な目的」の対峙語)にかなった政策のことである。そして「正しい」目的とは「善い」目的のことである。それゆえ、この意味が明確なものになるためには、「善」とは何かが示される必要がある¹¹。

「善」の問題に行き着くとき、ホートリーはムーアの「善の定義不可能性」に従う¹²。善は定義不可能であるというのは、それがマインド（精神）により直覚的にのみ知られるもの、という意である。ホートリーはこの善を彼の社会哲学の根底にすえる。

… モラル・コード[道德律] およびあらゆる人間行動の原理の究極的基礎として善に代るものはない (RP, p.136).

ホートリーは、「正しい目的」（したがって「正しい政策」）の定義は行わない、と断っている¹³が、注意すべきは、人は正しい政策を識別できる、と考えている点である。善は「すべての人間の知性の範囲内」(RP, p.136)にあり、しかもそれは客観的なもの、と考えられている。善を見つけるのに、哲学からの導きは不要である。日常行っている判断に訴えればよい。ホートリーはそう考えている。

われわれは善や、究極的目的にたいする手段の関係の省察に慣れてはいないが、それを含むわれわれの判断はすべての現実生活に行きわたっており、それゆえそれに基づくモラル・コードは堅固な基礎を有する (RP, p.136).

… 善は彼にとってだけの善ではない。彼の経験は彼にとっての経験だが、善という属性はその経験に内在する… .善を経験する個人は、善が実現されるチャンネルにすぎない (RP, p.69c).

ホートリーは『正しい政策』の序で、本書の目的を、政治的・社会的問題について、人間の意識に内在する価値観に訴えることで明確な思考を助けること、と述べている。だが、「正しい政策」の「正しさ」、「善さ」が定義できず¹⁴（といいつつも、「善」という属性は、「審美的快楽」、「知的快楽」、および「人的価値」という感情の状態にまで拡張される、と主張されている¹⁵）、人はそれを（モラル・コードなどに基づき）直観を通じて得る、というのであれば、出発点から目的が読者任せにされているという印象が拭えない。

3. アスペクトの理論

ホートリーの哲学は「アスペクトの理論」と称すべきものである（彼は若くから「アスペクト」を根本概念¹⁶として重視していた）。『正しい政策』pp.32-53でも論及されているが、本格的な検討は、彼の唯一の哲学書で、これまた未刊の『思考と事物』（Hawtrey Papers, 12/1.全8章で構成されたタイプ刷り314枚。以後、*TT*と略記）でなされている¹⁷。

それは、「意識的な経験におけるアスペクトの識別をめぐる思考分析」を主題とするものであり、「内省」的手法が用いられ、マインドがアスペクトを識別するという点に中心がおかれている。アスペクトは外界の事物に「本性的に内在する」が、そのままでは潜在的であって、マインドにより意識的な経験として認識されることで現実のものとなる、と彼は主張する¹⁸。ある絵画をみて、ある人はそこに「繊細な美」を、また別の人は「微妙な影」を見出す。いずれも、絵画に内在するアスペクトであり、それは個々人により意識的に認識されることで現実化する。

アスペクトは全体としての事物と切り離すことができないものである。「繊細な美」は絵画という外界の事物に潜んでおり、マインドによる意識的な認識を通じて現実化するるのであるが、それを部分として事物から切り離せるわけではない。マインドが獲得したアスペクトは、マインド内に蓄えられていく。マインドは何かを判断するさい、こうして蓄積されてきたものに絶えず参照を求めていくことになる。

この哲学にあつて、人のマインドは、不完全とはいえ、事物からアスペクトを認識する能力を有する存在とみなされている。知る能力をもつマインドが、さまざまなアスペクト — 感覚経験のアスペクト、感情・感動のアスペクト、思考のアスペクト等々 — を知覚する。

行動主義や唯物論は、個々人の認識能力とは独立したものとして事物・事象を説明しようとする客観主義哲学である。これに比し、ホートリーの哲学は経験論の流れに属しており、主客の中間に位置する。それは個人の認識能力と外界に潜在的に存在するとされるアスペクトを根底にすえたものであり、マインドを無

視する行動主義や唯物論とは対照的な立場に立っている。また、すべてを事物で説明しようとする科学主義にたいしても、同様の視点からそのもつ限界を指摘する立場に立っている¹⁹。

このホートリーの認識論は、ムーアのそれとも異なっているという点に注意が必要である。ムーアの場合、事物とマインドのあいだには、いわゆる「センス・データ」が介在する。それによれば、マインドは感覚を通じ外界の事物をセンス・データのかたちでとらえる²⁰。これに比し、アスペクトはセンス・データに属するというよりは、外界の事物に潜在するものと考えられているのである。

4. ムーア主義倫理学

20世紀初頭のケンブリッジの最も優秀な学生達 — 彼らが集ったのが「ソサエティ」である — を引きつけて離さなかったのがムーアである²¹。ホートリーはその一角を占めていた。のみならず、彼はムーア倫理学を自らの哲学・倫理学の基底として終生もち続けた²²。既述のように、この点が『正しい政策』の根本的な基点にすえられている。こうした点はケンブリッジの他の同僚には認められない。

善は定義することができず、直覚によってのみ把握できる。いわゆる「善の定義不可能性」である。そしてすでに述べたように、ホートリーが『正しい政策』にあって最重視するのがこの「善」である。

世界は、ムーアが善という属性を哲学の曖昧性および懐疑性から解放したことに感謝すべき理由をもっている、とわたしは思う (RP, p.16)。

注目すべきことに、「自由」は『正しい政策』にあって最高位におかれてはならず、「中間的な目的」とみなされている。多様性を得ようとする人間の能力にたいし広範囲にわたる機会を提供するものとして、それは高貴な理想ではあるものの、真の目的ではないからである²³。

「中間的な目的」についてみておこう。現実的な導きとして、「行為のコードもしくは道徳律(モラル・コード)」はさまざまな中間的目的を提示しているとして、「正直,信用,親切,財産・家族・権威・個人の権利や感情への尊敬」があげられている²⁴。本能や「賞罰システム」も然りである²⁵。ホートリーは中間的な目的の, 現実世界における必要性を承認している。だが,それが過度になる場合,「偽りの目的」に墮すことになるにとらえている。その事例として,「物質所有欲」(これにたいし,満足を共有しあうモラルが対置される²⁶) ,「貨幣欲」(他の価値ある感情が損なわれる),「安全性」(犯罪者への処罰そのものが望ましいという気持ちが発生する可能性がある) ,「利己主義」があげられている。

「中間的な目的」のあり方は,指導者にとってその批判の対象として措定されなければならない,と彼は考えている。

[規則コード]自身,中間的な目的のコードにすぎない…。現行のコード自身,批判にさらされねばならない…。正義も自由も,安全も,…批判から逃れることはできない (RP, p.72a)。

5. 社会認識

それではこうした哲学的スタンスからホートリーは社会をどのようにとらえているのだろうか。そのさいのキー・ワードとして「指導者」,「進化論」が重視されていることが,容易に認められる。

5.1 指導者 (支配者)

ホートリーが社会を語るとき,それがどのような形態であろうと,そこには権力が存在する,と考える。そして,社会には権力を掌握しそれを行使する指導者²⁷とそれに従う従者が存在する。とりわけ,ホートリーは社会が存立していくうえで,指導者 (ならびに「指導者階級」²⁸) を重視する。「権威」もしくは「権力」というタームはそれに関連して登場してくる。

権威は条件付きで支配者としての指導者に移譲される。社会は彼の掌中にある道具となる。社会のメンバーは、指導者が… [人々] の個人的目的を促進するようにこの道具を用いるという条件で、彼に忠誠と服従を付与する (RP, p.21).

これは社会の形態にかかわらず、然りである。民主主義社会といえども異なるところはない。大衆が選挙を通じて「権力」の行使を議会に委ねる。議会は権威をもち、さまざまな命令を下す。大衆は、それらの命令がその時点での社会に通底する規範・慣習から逸脱していないかぎり、権力の移譲を容認する。それが民主主義である。

民主主義の目的は、専制政府や寡頭政府にたいする不平の唯一の治癒策である反乱という権利を、全大衆にゆだねられるコントロールのシステムに取って代えることである (RP, p.108).

「社会は … その手綱さばきにおいて意識的な指図を必要とする」 (RP, p.20) というのがホートリーの社会認識の基本である。社会において集団が指導者を承認し、そして指導者によって意識的な指図がなされ、人々がそれに忠誠と服従を示すという状況が実現することで、集団の行為が合理化されていく道が開けるが、そうした指導者を頂かない社会は混乱に陥る傾向がみられる、という認識である。

こうした認識は、彼がコレクティヴィズムを論じるとき (後述の第 6.3 節を参照)、また世界全体をみるとき (後述の第 7 節を参照) の根底に存在する。20 世紀の初頭、ヨーロッパでは「エリート理論」 (「指導者社会学」)²⁹ が流行していたが、ホートリーがそれらから影響を受けているのかいなかを、うかがい知ることはできないが、その可能性は大いにある。

ホートリーは、人々が慣習的に遵守している道德律、そしてこれなくしては秩序の維持が不可能となる道德律が存在する、ということを強調している。指導者であっても、その道德律を遵守していることが、指導者としての地位を維持する

ためには不可欠である,とされる。

5.2 進化論

ホートリーの社会認識にあつて,進化論的発想³⁰はかなり明瞭に表明されている。人間のマインドは,当初から思考と知識の完全な道具であつたわけではない。それは,有機体の行動をその環境に適応させる手段としての自然淘汰の圧力のもとで進化してきた。人間のマインドの,そこでの主要な働きは,物的環境についての印象を記憶し,「本能的性向」を通じて適切な行動を起こすことであつた³¹。そして「マインドがひとたび十分な発展を遂げると,それはずっと早い社会的進化 - そこでは,本能的反応は「意識的な計画化」によって補完される - への道を開いた」(RP, p.4)と主張される。人間は動物的本性に合理性が加わつた存在なのである³²。

人間の進化は,とりわけ意識の進化である。意識はそれ自身高いサバイバル価値を有している。… 生理学的進化の展開により,人が体系的な思考のできる頭脳を与えられるとき,意識的な計画が可能になる (RP, p.11)。

現在の人間のマインドは,本能的性向を通じた自然淘汰的進化および社会的進化の過程を通じて醸成されてきた。マインド自体,進化するものであり,そして進化したマインドは体系的な思考ができるため,社会のなかに「意識的な計画化」の導入が可能となり,社会の進化はその速度を増すことになった,とホートリーは考えている。

以上が,人類の有史段階以前での進化の説明であるとすれば,有史段階での人間のマインドの進化を説明するために用いられているのが「合理化」である。これは,宗教的教義が「理性」によって説明可能なものにされていく過程としてとらえられている。そのことで,宗教から神秘的要素が消え,理性により理解可能となる領域が増えていくことになる。それまで人々が理解できないため崇拝していた事象・現象にたいし,理性がそれを合理的に説明できるようになる傾向のことである。それゆえ,「合理化」³³とは一種の合理主義哲学の進展であり,啓蒙主義思想の浸透である。

マインドは、ひとたび進化を遂げると、自らの感情の状態を含め、すべてのコトについて [拘束を離れて] 自由に考えるようになる。これらのコトが望ましいと判断されるとき、そしてマインドが正しい目的にたいする正しい手段を認識するとき、合理的な行動への道が開かれる (RP, p.69a).

合理的な行為は目的に向けられる。合理性は、所与の目的を達成するための正しい手段の選択を必要とする。しかし、それはもっと重要なものを必要とする。目的自身が正しい目的でなければならない (RP, p.3).

人間社会が進化を遂げ、意識が進化することで、人は「善」の問題に目覚め、そのことで倫理的価値とは何かという問題に関心をもつようになる。

進化のなかで倫理的価値基準の探究が実現するのは、進化のこの段階における人間社会が善に目覚めるからである (RP, p.9)³⁴.

6. 経済認識

本節では、「[善という] 究極目的を経済問題に適用すること」³⁵を主題とする第6章 - 第10章を対象とする。そこでは、とりわけ「経済的目的」と「経済的正義」が問題にされている³⁶。ホートリーの経済認識の一番の特徴は、「究極的目的」たる「善」の重視が、ここでも顕著に認められる点である。本節ではもう1点、2つの体制（資本主義と集産主義）比較という論点を取り上げることにする。

6.1 経済的目的

ホートリーの経済認識の根底を規定しているのは、最終生産物を「ユーティリティ生産物」と「プラス生産物」に分類している点である³⁷。「ユーティリティ生産物」は生存に必要な生産物で、生命を維持し、ケガ、苦痛、あるいは不快から人

を守る生産物である。これにたいし、「プラス生産物」は、何か積極的な便益もしくは楽しみを与えるように意図された生産物である。ホートリーは、経済活動が「正しい目的」にたいして何らかの積極的な貢献をなすとすれば、それはプラス生産物に求められる、と考えている³⁸。ただし、プラス生産物の目的と「善」を同一視してはならない（例えば、人的価値などは、プラス生産物に依存するわけではない）。

ホートリーは、最終生産物をこうした視点からみており、絶えず、彼の意味での「価値判断」が入り込む。彼は、マーシャルやピグーが、経済分析の対象を経済的厚生に絞り込むという方法にたいし批判的であり、「善」という「真の目的」との関係で経済活動を評価しようとする。プラス生産物が、「正しい目的」に貢献するという場合、「審美的快楽」や「知的快楽」がもたらされる — 消費者がそれらを認識する — という「アスペクトの理論」が前提されている。

もとより、プラス生産物も市場で取引されるものであるから市場価値を有する。生存に必要なユーティリティ生産物を超過する最終生産物がプラス生産物であり、そのあり方が、経済活動と「善」の達成を関係づける。だが、プラス生産物の本性的な価値と市場価値との齟齬はあまりにも大きい。ホートリーは、このことがいかにして解決できるのかに、回答を与えてはいない。

ついに超絶的な価値をもつものとして認められる運命をもつ作品の市場価値は、かくして非常に低いかもしれない。そして、そのような作品が承認され、高い現金価値が付されるときでさえ、その現金価値を、その本性的なメリットの尺度としてとることはできない。現金価値は、プラス生産物の審美的価値あるいは知的価値とほとんど関係がないのである(RP, p.159)³⁹。

ホートリーにあっては、経済活動が社会における「善」の達成に貢献できるためには、プラス生産物がどのように進展するのかに依存する、と考えられている。教育を考えるさいにも、この視点が顕著である。

… 教育の目的は、支配者階級にとって適切な価値観・鑑賞力を、すべての人々に拡張することであるべきである。… 価値観、すなわち正しい目的観

… (RP, p.303).

教育の多くは、… ユーティリティ生産物として扱ってもよい。… 教育がこれらの限界を超えるやいなや、プラスの側面が支配し始める。教育が良いマナーや健全なモラルを吹き込むとき、それは人的価値への道を用意する。そしてそれが文学的、芸術的、科学的趣向を発展させるとき、それは「プラス生産物」という高度なレベルの鑑識を開化させる (RP, pp.290-291)。

だが、ホートリーのプラス生産物をめぐる扱いはあいまいである。一方で、プラス生産物の価値は、その芸術性にあり、その価値を認識できる人々の存在に依存する、とされる。他方で、プラス生産物は市場で取引される商品であり、それは現金で評価され売買されるしかない。たしかにプラス生産物の本性的な価値と市場価値との齟齬は大きい。しかし、それは教育により人々の鑑識能力が上昇したとしても埋められるものではない。プラス生産物のなかには、その審美的価値が現金価値と関係しないものも存するからである。ホートリーは生産物の倫理的・審美的側面を「正しい目的」との関連で重視するあまり、現実の資本主義経済にみられる市場取引・交換経済の本質を見誤っているように見受けられる。

「プラス生産物にたいする需要」(RP, pp.274-278a)で、プラス生産物はマーケティング方法の相違により異なる、という旨が論じられている。そのなかで、貴族社会の富裕なパトロンが存在する社会とは異なり、産業社会では中流階級がそれを担うようになっていることが指摘されているが、このような社会での「プラス生産物」への需要についてのホートリーの叙述は悲観的かつあいまいに思われる。

ホートリーは、市場経済にあって、商人(ディーラー)の機能・能力が他の経済主体に比べ傑出していると考えている。とりわけ、そこにおける販売の決定的重要性との関連で商人のはたす役割が強調されている。市場組織は、「売買に特化した、すべての来場者を処理する意欲のある商品のディーラー」(RP, p.180)で構成され、「需要と供給を均衡させる価格の生成は、市場におけるディーラーの提供するサービスの重要部分である」(RP, p.181)。これに比し、消費者にはそうした能力に欠けるところがある⁴⁰。したがって市場における経済主体のあいだには能力

差がある、というのがホートリーの基本的な見解である。

以上の指摘は重要だが、それでも上記の「齟齬」を商人が解決できるというわけではない。プラス生産物における消費者が、その鑑識能力を教育によってレベル・アップしたとしても、それが「齟齬」の縮小に寄与する可能性は、プラス生産物の価値の定義からみて小さいといわざるをえない。

資本主義経済の進展は、生存に必要な財を超える財を生み出した。だが、それはホートリーの定義する意味での「プラス生産物」とはいえない。それは電化製品であり、医薬品であり、自動車である（耐久消費財は「ユーティリティ生産物」とみなされている⁴¹）。これらの生産には、現代産業技術の粋が結集している。それは生活の利便性を飛躍的に向上させるものである。また、それらは、時とともにデザイン性の飛躍的な向上をみせてきた。しかし、それらの成長を規定する最終的なものは市場での採算性であり、そしてこの採算性は、規模にたいする収穫逓増性に依存するところが大きい。ホートリーが望むように「正しい目的」との関係において審美的価値をもつ「プラス生産物」という視点から現代の資本主義経済をとらえることは、無謀、もしくは夢想というほかはない。

6.2 経済的正義

善という究極的目的の経済問題への適用にさいし、特別に重視されているのは、「経済的目的」と並び「経済的正義」である。しかし「経済的正義」は「中間的目的」であるから⁴²、無条件的に主張されると「偽りの目的」に陥る⁴³。

それはモラル・コードの一部であり、社会が機能する制度に適用されるとき、指導者にとっての道徳的義務になる⁴⁴。

経済的正義は、資源の分配において、人々のあいだに恣意的な差別が生じないことを要請する。だがそれはまた分配を支配するルールが善いルールであることを要請する (RP, p.172)。

ホートリーは2つの分配システムを提示する。「報酬のシステム」と「必要に応じてのシステム」である⁴⁵。前者は個人が生産するものに等しいものがその個人に属するシステムで、資本主義社会で採用されているものであり、後者は共産主

義社会が理想とするものである⁴⁶。「経済的正義」は、この2つのシステムの妥協として求められる。一方で、正義は、諸個人を遇するに恣意的不平等を禁じる概念である。「正義であるということは正しい、というように理解されねばならない。適合すべき規則は善いルールでなければならない」(RP, p.169)。したがって、指導者は、「必要に応じての」分配により、それを自力で満たせない人々に社会サービスを施さねばならない。他方で、「報酬のシステム」における正義が考慮されるべきであるならば、それによって抱かれた期待が損なわれるようなことがあってはならない。それもまた遵守しなければならない道徳的義務である⁴⁷。

こうして社会サービスが提供されるとき、「正義」という概念が、2つの分配システムのいずれにあるべきかの決定はできない。ホートリーのくださった結論は次のようなものである。

必要に応じた分配は、何らかの確たる理由により自らの稼ぎによって確保できない人々にたいし、ある標準を提供し、そして利用可能な生産物の残りは、おのおのの貢献相当額というかたちで配分される — 税による適切な控除という条件のもとで (RP, pp.172-173)。

6.3 資本主義と集産主義

ホートリーは、資本主義と集産主義⁴⁸ (コレクティヴィズム。私的企業を禁止し、コレクティブな所有を許容する経済システム⁴⁹) にどのような評価をくだしているのだろうか。以下に、3点につきその要点を記すことにする。

- (1) 金融政策による経済の調整は、集産主義の方が資本主義よりも容易である。資本主義の場合、政府ができるのは、信用経済の動向にたいし施す間接的調整だが、それは剃刀のうえでバランスをとる類いの難しさがある。コレクティヴィズムはこの難しさを免れている⁵⁰。

ちなみに、金融政策の目的は物価の安定におかれているが、ここでのホートリーの論述は、かなり貨幣数量説的なものになっている。

- (2) 集産主義では、イノベーションや革新的企業の創設が難しい。官僚的機構に依存するシステムだからである⁵¹。これに比し、資本主義では、何を作るのかは個々の企業者に任されており、選択の幅は企業者の数だけ存在する。

集産主義では、当局にたいする責任説明が大きなネックになる。高級官僚が省内の専門家に意見を求めるとしても、イノベーションは慣れ親しんだコースからの危険な逸脱と思われるからである。

- (3) 資本主義にあっても、累進課税により、事実上、このシステムのもつ不平等性（それは利潤と土地所有から生じる）を平等主義的に是正することで、集産主義に近接することが可能である。

(1)は集産主義が、(2)は資本主義が優位とされている。そして(3)は資本主義でも可能とされている。そのうえで、ホートリーは、いずれのシステムに軍配をあげるのであろうか⁵²。『正しい政策』では、最終的な判定はくだされてはいないものの、『経済問題』や『経済的命運』に比べ、政治スペクトラムでいえば、明らかに右方にシフトしていることは指摘しておいてよいであろう。

7. 世界平和

『正しい政策』はかなりの紙幅を世界の政治情勢に割いている。とりわけ、米ソ冷戦構造、スエズ危機、朝鮮戦争などへの言及が多くみられ、その状況下におかれている国際連合の弱い立場が強く意識されている。

ホートリーが世界を語る時、中枢的概念として用いられているのは「バランス・オブ・パワー」である。文字通り、それは独立した国家間の権力の均衡⁵³を意味しており、世界平和達成の一手段である。ホートリーは、どのような形態であれ、社会にはかならず権力が存在すると考えている。国家も権力を有する。そして独立

した国家同士は潜在的にいつも敵国⁵⁴である。世界をみるときにも、彼にあってはそれを1つの社会とみなし、そこには支配者と被支配者、および権威が存在する、という考えが貫流している。

独立諸国家が存在するだけの状態は、ディッキンソン⁵⁵のいう一種の「国際アナキー」⁵⁶であり、その状態では世界に平和がもたらされることはない。この状態からの脱却としてホートリーが目指すのは、「大国の協調」による平和共存であった⁵⁷。

大国による協調は、変化する状況に国際システムを適応させるさいに、戦争に代る原理の適用における協力を意味する。戦争がもはや制度でなくなるとすれば、彼らが同意しなければならないのはこの原理である (RP, p.467)。

ホートリーにとって、「戦争」は、変化への社会の適応において、これまで本質的な役割を演じてきた「制度」⁵⁸であり、善の追究を否定する行為である⁵⁹。彼はそのうえで国際連合を世界平和達成の手段として蘇生させることを熱望している。

ひとたび [大国間で] 必要な同意と協力が確保されたならば、国際連合が行動の道具を提供するのに身近なものとなるであろう (RP, p.466)。

8. ケンブリッジの哲学的展開⁶⁰

以上、ホートリーの社会哲学を『正しい政策』を通じてみてきた。それでは彼はケンブリッジを襲った哲学的展開の激流のなかで、いかに対応したのであろうか。これが本節で確認しておきたいことである。

始まりは、とりわけ倫理的始まりは、ムーアの倫理学に求められる。ムーアの倫理学の最も大きな特徴は、「善の定義不可能性」にある。善を定義することはできない、それを他の概念で定義することは自然主義的誤謬を犯すもの

である、とムーアは断じることで、既存の倫理学に強烈なる批判を加えたのである。善は善であり、それを他の言葉で置き換えることも、分解することもできない、と。ではいかにして人間は善を知覚することができるのであろうか。ムーアはそれを「直感」に求める。(すべての)人間にはそうした直感が備わっており、それを通じて「善」を知覚することができる。これがムーアのいわんとしたことである。

この考えは計り知れない影響を及ぼすことになった。われわれはすでにホートリーがこの考えの終生を通じた信奉者であることを確認している。ケインズが『確率論』に至る過程でムーアから受けた影響も深甚である。当初の出発点がムーアの「倫理学の行為にたいする関係」批判であることに加え、「命題間の合理的信条の度合い」とされる『確率論』における「確率」の定義自体、非常にムーア的である。「命題間の合理的信条の度合い」は人間のもつ直感によってのみ知ることのできるもの、とされるからである。ムーアの「善の定義不可能性」の認識論が「確率」にたいして適用されているのである。ムーア倫理学がケインズの世代、とりわけ「ソサエティ」のメンバーであり、後に「ブルームズベリー・グループ」の主要メンバーになった人達 — リットン・ストレイチー、レナード・ウルフなど — に大きな影響を及ぼしたことは、あまねく知られている。

いま述べたように、ムーア倫理学は直感主義、客観主義的特性をもつ。そして善を事実と主張する点で「認知主義」である。じつは、こうしたムーア倫理学にたいしてはすぐに批判の声があがり、そちらの方が1920年代-1950年代を通じてメタ倫理学として優位を占めることになる。いわゆる「情緒主義」の台頭である。これは、「善」を「われわれの態度を表現する情緒的サインとしてのみ役立つ」(Davis [1994], p.45)ものとして捉える立場に立つ。善を捉える直感が誤る可能性を考慮しない客観主義にたいし、善を個人主義的なものとして捉えるべきことを強調する立場である(したがって「非認知主義」の立場に属する)。情緒主義はオグデン、リチャーズ、スティーブソンによって推進されたが、彼らは「検証可能性」を旗印にする「論理実証主義」 — 分析的か実証的に検証可能な命題のみが科学の対象とされるべきものであり、そうでないものは形而上学として排除するという考え方 — と立場を共有していった。その代表格が

エイヤーである。さらにこの考え方を色濃く有するのが、ロビンズの提唱した方法論である。情緒主義はその後すたれたのであるが、ロビンズ的思考は今日に至るまで経済学に大きな影響を与え続けてきている。ロビンズは、実証科学としての経済学と当為としての倫理学とのあいだには大きな溝がある、と主張した。そしてその立場は、経済学と倫理学を分離することを拒絶するホートリー（それにホブソン）と対立するものであったことが、ここで強調される必要がある⁶¹。

ところでムーア倫理学にたいする批判には、情緒主義とは別の流れが存在する。それを代表するものが後期ウィットゲンシュタインであり、そこで展開されている「言語ゲーム論」は哲学者としての後期ケインズにも踏襲されている。ケインズが科学としての経済学を主張するロビンズに対決して、道徳哲学としての経済学を主張しているのも、こうした後期ケインズの発言として理解することができる。

話はここで終わらない。例えばラムゼーがいる。ラムゼーは前期ケインズの主著『確率論』を「真理と確率」(Ramsey [1926]. Ramsey [1990]所収)で徹底的に批判している。そしてそれに代るものとしての主観確率論を提示することで、意思決定論、合理的選択論者の創設者として今日知られている。そのさい、ラムゼーはパースからプラグマティズムの影響を受けているし、また J.S.ミルの功利主義的心理主義からも影響を受けている。さらに、ラムゼーは後期ウィットゲンシュタインの形成にスラッフアとともに大きな影響を与えていることが知られている⁶²。

このような倫理学・哲学の激変のなかにホートリーはいた。そして本稿で対象とした『正しい政策』が執筆されたのは、それらを経過した後のことである。しかもホートリーは同時期に哲学的遺稿『思考と事物』を執筆している。これらの内容をもていえることは、ホートリーは若いときに得たムーアの「善の定義不可能性」に基づくムーア倫理学、ならびにホートリー特有の「アスペクトの理論」を一貫して保持したという点である。その意味で、彼は、ケインズが若い頃ムーア倫理学に熱中していたものの、後期に至ってはそれに批判的なスタンスをとるようになったのとは異なり、一貫した姿勢をとったのである⁶³。

9. むすび

ホートリーはケンブリッジにあって、自らの思考を体系的に展開しようとした唯一の人物であった。周知の貨幣的景気変動論は彼の体系にとって一角を占めたにすぎない。彼の目指した体系は、人間社会を包括的に把握しようとするものである。そのさい、根底をなす考え方として、ムーアの「善」が重視される(この点で、ホートリーはムーア主義者のなかでも異彩を放っている)。「真の目的」はムーア的意味での「善」と関連しており、指導者はその推進を専一に心がけることが肝要である。これに対し、公衆は「中間的な目的」を目指して日常生活を送る存在である。

ホートリーにとって、「正しい政策」は定義することはできないが、それがどのようなものであり、そして目的と手段を識別し、目的として善いもののみを直接的判断の対象にするということは、十分に現実的に可能なことである。「善」に基づく「正しい政策」の遂行にとって重要なのは、「正しさ」を直覚的に認識できる人間の力である。それを人間が有するに至ったことを、彼は、進化論的視点ならびに合理化思考の進展から説明する。

指導者は「中間的な目的」が「偽りの目的」に転じないように、絶えず「中間的な目的」を「真の目的」の視点からチェックすべきである。この意味で、「正しい政策」は、「真の目的」の見地からの価値判断が要請されるところのすぐれて哲学的・倫理学的問題である。こうした視点に立ち、さまざまな社会・経済現象を批判的に分析する体系、これが『正しい政策』でホートリーが目指したものである。

注

* 本稿は平井編著[2009]の第5章として公表を予定している。

- 1) Hawtrey [1913] が代表作である.
- 2) Hawtrey [1925]がそれである.
- 3) Hawtrey [1932]がそれである.しかもそこで展開されている批判は,Hawtrey (1928) に基づいており、『一般理論』の論点を先取りするところがあった(この点は今日に至るもほとんど無視されてきている).平井[2003], pp.334-336)を参照.
- 4) ホートリーを対象とした著作は Deutscher[1990]のみである.そこでもマクロ経済学への貢献が主題となっており,社会哲学への言及はみられない.
- 5) レナード・ウルフやリットン・ストレイチー(ともに1980年生まれでアボッスル)と同様,1歳年下のホートリーもムーア哲学の熱烈な信奉者であった.ケインズも含め,この世代の思想的傾向を考察するにさいして,ムーア哲学は非常に重要な位置を占めている.
- 6) 平井 [2007], 第5章「厚生と価値」はこれを対象にしている.
- 7) *RP*, p.1 を参照.
- 8) 類似の見解は,「厚生と偽りの目的」として,*EP*, pp.185, 314; *ED*, Ch.12)で詳細に論じられている.ここにいう「厚生」とは「真の目的」として措定されているホートリーの意味での厚生である.
- 9) *RP*, p.72 を参照. こうした国家観はプラトンの「理想国家」を想起させるものがある.実在界を認識できる哲人王による,職業的分化に専念する大衆の社会の支配,という構想が,である.
- 10) *RP*, p.69d を参照.
- 11) *RP*, p.3 を参照.
- 12) *RP*, p.4 を参照.
- 13) *RP*, p.4 を参照.
- 14) 同様のことは,『経済問題』での「厚生」にもいえる.それは,それ自身善い経験を含む倫理的タームであり,目的に適用されるものとしての善と共存的なものとなる.*EP*, p.185 を参照.
- 15) *RP*, pp.54-55 を参照.
- 16) 例えば“Friday Club”で読まれた Hawtrey [1912]がある.『思考と事物』はこれに源を発する(第1章のタイトルは“Aspects”である).ホートリー

は、アスペクトは Langer の「形式」(form)に — 相違にも言及しつつ — 近いものと述べている。TT, p.52 を参照).

17) ホートリーの哲学は、ケンブリッジで展開された哲学的潮流（そこには、ラッセル、ケインズ、ラムゼー、ウィトゲンシュタインがいる）にあって、どのように位置づけられるのであろうか。そのさい、ケインズ、ウィトゲンシュタインの哲学は、前期と後期で異なっている（例えば、Coates [1996]を参照）という点が問題を複雑にするが、この検討は別の機会にゆずりたい。

18) これはパトナムの「内在的実在論」に通じているのかもしれない。「彼は … [Putnam [1987]] において、それまでの彼自身の立場であった科学的実在論や、心についての機能主義を自己批判して、外的世界におけるさまざまな対象の実在性ということを経験主体の側の関心や意味づけと密接に結びつけたものと解釈するプラグマティズムの擁護を行うとともに、真理とはすなわち科学的な真理のことであるという「科学主義」の批判を精力的に展開している」（伊藤 [1997], p.330）。

19) 「意識の領域」(ホートリーの立場)と「機械的因果関係の領域」(行動主義や唯物論の立場)のあいだの根本的相違を論じた TT, pp.241-243 を参照。

20) Russell [1912] は、その認識論の核心部分をムーアの「センス・データ」に負っている（“Sense-Data” [1910. Baldwin ed. [1993] 所収]を参照）。上述注 16 のホートリーの“Aspects”と同時期である点も興味のひかれるところである。なお後年、ラッセルは「精神と物質」(Russell [1956] 所収)で「精神も物質とともに事件の系列」(p.170)として取り扱われるべきとの見解を示している。

21) 例えば、Russell (1956, pp.79-80), Russell, Woolf *et. al.* (1959)を参照。

22) RP, p.4; TT, pp.100-105 を参照。

23) RP, p.71 を参照。

24) RP, p.37 を参照。

25) RP, p.69d を参照。

26) RP, p.70 を参照。

27) ホートリーは支配者を庭師に譬えている。RP, p.62 を参照。

28) RP, p.100 を参照。

- 29) 例えば,居安[2002],塩野谷[1995], pp.208-211 を参照.
- 30) 若き頃,ホートリーはムーアの教室で,審美的・文学的価値を適者生存説に立って議論したことを述べている (*TT*, p.96 を参照).ホートリーは,その後,ムーア的な直覚主義的倫理学を受け入れたが,本能に重点をおく適者生存説(自然淘汰説)をも部分的に保持してきたといえる.
- 31) *RP*, p.4 を参照.
- 32) *RP*, p.9 を参照.
- 33) 興味深いことに,ホートリーは合理化というタームで文明を定義している。「文明は,何か全面的に善いものとして,けっして理解すべきではない.それは行為のコードの合理化過程としてほぼ定式化できる.ある国家は,それがその制度および慣習を,意図的な諸目的に向けられた計画された諸手段と合致するようにモデル化し適応する能力をもつかぎりにおいて,文明化している.こう定義された文明は,混じりけのない善ではない.諸目的は善いかもしれないし,悪いかもしれないからである」(*RP*, p.314).
- 34) ハイエクにあっても,自生的秩序の形成(ハイエクはこれを「規則」とも呼んでいる)が進化論と関係させられて論じられている.だが「規則」は人々の意図せざる結果として実現されるものであって,理性的な認識の増大,意識の進化の成果とは考えられていない.それゆえ,同じく進化という概念が用いられていても,その使われ方は明確に異なっている. *RP*, p.180 を参照. なおハイエクの自生的秩序論についてのわたしの考えについては,平井 [2000], pp.299-301 を参照.
- 35) *RP* の序で明記されている.
- 36) *RP*, p.153b を参照.
- 37) *EP* では,「防衛的生産物」と「創造的生産物」,*ED* では,「ユーティリティ生産物」と「創造的生産物」に分類されていた.*RP* では「創造的生産物」が「プラス生産物」と改名されている.
- 38) *RP*, p.157 を参照.
- 39) *EP* では,ホートリーの意味における倫理的価値(=厚生)を根底基準におき,その見地から個人主義システム(=資本主義システム)の欠陥を批判する,というスタンスに立っている.そこでは,人間のもつ鑑識力の弱さにより,財市

場で決定される市場価値は倫理的価値との乖離を引き起こしているという認識が示されている。

40) *RP*, p.216 を参照.

41) *RP*, p.277 を参照.

42) *RP*, p.172 を参照.

43) *RP*, p.172 を参照.

44) *RP*, p.172 を参照.

45) *RP*, p.168 を参照.

46) *RP*, p.211 を参照.

47) *RP*, p.170 を参照.

48) *EP*, pp.337, 390, 379 ならびに *ED*, p.358 を参照.*EP* では、個人主義システムは、利潤獲得を動機として企業活動が行われ、それにより資本の蓄積、そして所得分配の過度の不平等を招来していると指摘されている。それらの根本は、結局のところ利潤にあり、それを廃絶することが厚生達成という真の目的にとって必須となってくる。こうして利潤に基礎をおかない、したがって「偽りの目的」である金儲け(金権主義)を廃絶し、真の目的である厚生達成を、国家を中心としたシステムによって目指す道、すなわちコレクティヴィズムへの道が志向されている。因みに、ホートリーが1914年以前に、ロンドンにある社会人教育の機関モーリー・カレッジ (Morley College) で読んだ論文 (Hawtrey Papers, 6/5/2, Churchill College, Cambridge University) は、次の文章から始まっている。「ともあれ理論的には、社会主義は民主主義の自然な連続体である…」。

49) *RP*, p.197 を参照.

50) *RP*, p.250 を参照.

51) *RP*, p.219 を参照.

52) 平井[2009]第4章(本郷亮「ピグー — 資本主義と民主主義」)で論じられているピグーの見解と比較してみるのも興味深い。

53) *EP* でホートリーが金儲け以外に注目したのが「権力」である。とくにこの概念は、国際舞台で展開されてきた事象をとらえるさいのキー概念になっている。「拠点」(interpost)を設けての諸国家間の争い、植民地獲得競争、征服活

動は、「国力」を自己目的化することで、戦争への道を開くことになった。これらの行為は、「権力獲得」と「金権主義」が密接に結びつくかたちで展開されてきた。ホートリーは、「権力獲得行動」や「金権主義」が自己目的化し、「偽りの目的」であるにもかかわらず、実際上の目的として志向されてきたことに警告を発している。『正しい政策』でも、「権力獲得」と「金権主義」を自己目的化する人間の思考様式を改める必要性、そして潜在的戦争状態になってしまっている今日の平和を「真の平和」に変える必要性が説かれている。

54) *RP*, p.495 を参照。

55) ロジャー・フライは、ディッキンソンの無二の友であり、「彼の共感はすべて「国際連盟」を設立しようとして闘うローズ・ディッキンソンに向けられた」(Woolf, V. [1940], p.272)。

56) *ED*, Ch.10 (「国際的アナーキーと国際連盟」) において、戦間期の経済的混乱の最大の要因として「国際的アナーキー」があげられている。

57) *RP*, p.522 を参照。

58) *RP*, p.357 を参照。

59) *RP*, p.351 を参照。

60) 以下、Davis [1994]に負うところが少なくない。情緒主義については、Wikipedia (英語版)も参照。

61) さらに、ホートリーはピグーの『厚生経済学』(Pigou[1920])が厚生を経済的厚生に限定していることに批判を加えている(*EP*, pp.184-185 を参照。これにたいする応答はPigou [1950], p.17, fn.3にある)、という点も、ロビンズの「個人間の効用比較の不可能性」とともに、ここで指摘しておく価値がある。またこうした発言をするロビンズにたいしてハチソン(Hutchison [1938])の有名な批判 — 個人間の効用比較が不可能であるならば一人の個人のなかでの効用比較も難しいのではないかという批判 — もここに記しておく価値がある。なお、ホートリーやホブソンの立場は福田徳三によって共感をもって迎えられている。これは彼のいう「価格の経済学」と「厚生経済学」の識別(福田[1922], p.169)に由来する。

62) 影響を与えているというのは、同じ考えに収斂したという意味ではない。むしろ非常に緊張・対立の激しいものであったと考えられる。スラッフアとのあ

いだにみられる緊張感の迸る哲学的対立については, Kurz (forthcoming) を参照.

63) こうした姿勢は経済学においてもいえるように思われる。

参考文献

Baldwin, T. ed. [1993], *G. E. Moore: Selected Writings*, Routledge.

Coates, J.[1996], *The Claims of Common Sense: Moore, Wittgenstein, Keynes and the Social Sciences*, Cambridge University Press.

Davis, J.[1994], *Keynes's Philosophical Development*, Cambridge University Press.

Deutscher, P.[1990], *R. G. Hawtrey and the Development of Macroeconomics*, Macmillan.

Dokic, J. and Engel, P. [2002], *Frank Ramsey*, Routledge.

Hawtrey, R.[1912], “Aspects” (Hawtrey Papers, 12/1, Churchill College, Cambridge University).

Hawtrey, R.[1913], *Good and Bad Trade*, Constable & Company.

Hawtrey, R. [1925], “Public Expenditure and the Demand for Labour” , *Economica*, March.

Hawtrey, R.[1926], *The Economic Problem*, Longmans, Green and Co. (EP と略記).

Hawtrey, R.[1928], *Trade and Credit*, Longmans, Green and Co.

Hawtrey, R.[1932], *The Art of Central Banking*, Longmans, Green and Co.

Hawtrey, R.[1944], *Economic Destiny*, Longmans, Green and Co. (ED と略記).

Hawtrey, R.[時期不詳], *Right Policy: The Place of Value Judgements in Politics* (Hawtrey Papers, 12/2, Churchill College, Cambridge University. RT と略記).

Hawtrey, R. [時期不詳], *Thought and Things* (Hawtrey Papers, 12/1, Churchill College, Cambridge University. TT と略記).

Hutchison, T.[1938], *Significance and Basic Postulates of Economic Theory*, Macmillan.

- Kurz, H. [forthcoming], “If Some People Looked Like Elephants and Others Like Cats, or Fish ...: The Case of Wittgenstein and Sraffa”.
- Langer, S.[1942], *Philosophy in a New Key: A Study in the Symbolism of Reason, Rite, and Art*, Harvard University Press.
- Langer, S.[1953], *Feeling and Form: A Theory of Art*, Scribner, 1953.
- Long, D. and Wilson, P. eds.[1995], *Thinkers of the Twenty Years’ Crisis*, Clarendon Press.
- Moore, G. E.[1903], *Principia Ethica*, Cambridge University Press (深谷昭三訳 [1973] 『倫理学原理』 三和書房).
- Pigou, A.C. [1920; 1950], *The Economics of Welfare*, 4th edition, Macmillan (初版は 1920 年. 1950 は第 4 版).
- Putnam, H.[1987], *The Many Faces of Realism*, Open Court.
- Ramsey, F.[1926], “Truth and Probability” (in Ramsey [1990]).
- Ramsey, F.(ed. by Mellor, D.H.) [1990], *Philosophical Papers*, Cambridge University Press, 1990 (伊藤邦武・橋本康二訳[1996], 『ラムジー哲学論文集』 勁草書房).
- Robbins, L.[1932], *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*, Macmillan (辻六兵衛訳[1957], 『経済学の本質と意義』 東洋経済新報社).
- Russell, B.[1912], *The Problems of Philosophy*, Home University Library (高村夏輝訳[2005], 『哲学入門』 ちくま学芸文庫).
- Russell, B.[1956], *Portrait from Memory and Other Essays*, George Allen and Unwin Ltd. (中村秀吉訳[1959], 『自伝的回想』 みすず書房).
- Russell, B., Woolf, L., White, M. and Wisdom, J.[1959], “The Influence and Thought of G. E. Moore: A Symposium”, *Listener*, 30 April.
- Waddington, C.N.[1960], *The Ethical Animal*, Athenaeum.
- Warnock [1958], *English Philosophy since 1900*, Oxford University Press (坂本百大・宮下治子訳[1983], 『現代のイギリス哲学 — ムーア・ウィトゲンシュタイン・オースティン』 勁草書房).
- Wilson, D. [1978], *Leonard Woolf : A Political Biography*, St. Martin’s Press.
- Wilson, P.[2003], *The International Theory of Leonard Woolf*, Palgrave.

Wittgenstein, J.[1958], *Philosophical Investigations*, Basil Blackwell (trans. by Anscombe, G.E. M.

Woolf, L.[1916], *International Governments*, George Allen and Unwin.

Woolf, L.[1928], *Imperialism and Civilization*, Hogarth Press.

Woolf, V.[1940], *Roger Fry: A Biography*, Hogarth Press (宮田恭子訳[1997],『ロジャー・フライ伝』みすず書房).

ウイトゲンシュタイン (野矢茂樹訳[2003]), 『論理哲学論考』岩波書店.

カント (宇都宮芳明訳[1985]), 『永遠平和のために』岩波文庫.

デカルト (山田弘明訳[2006]), 『省察』筑摩書房.

プラトン (久保勉訳[1952]), 『饗宴』岩波書店.

プラトン(藤沢令訳[1979]), 『国家』(上)(下) 岩波書店.

ラッセル (中村秀吉訳[1959]), 『自伝的回想』みすず書房.

伊藤邦武[1997], 『人間的な合理性の哲学』勁草書房.

居安正[2002], 『エリート理論の形成と展開』世界思想社.

黒田亘編[1978], 『ウイトゲンシュタイン』平凡社.

滝浦静雄[1983], 『ウイトゲンシュタイン』岩波書店.

平井俊顕[2000], 『ケインズ・シュムペーター・ハイエク』ミネルヴァ書房.

平井俊顕[2003], 『ケインズの理論』東京大学出版会.

平井俊顕[2007a], 『ケインズとケンブリッジ的世界』ミネルヴァ書房.

平井俊顕編著[2007b], 『市場社会とは何か』SUP 上智大学出版.

平井俊顕編著[2009], 『市場社会論のケンブリッジ的展開 - 共有性と多様性』日本経済評論社(近刊).

福田徳三[1922], 『社会政策と階級闘争』改造社.

松嶋敦茂[2005], 『功利主義は生き残るか』勁草書房.